コラム　地域の絆　思いやり

徘徊老人に間違えられて

金融・労働研究ネットワーク　田中均

私の住んでいる町田市では、認知症などで行方の分からなくなった人の早期発見のため「防災放送」がアナウンスします。「〇〇町にお住いの××歳の方の行方が、〇〇日〇〇時からわからなくなっています。身長は××センチメートルくらい、着衣は〇〇です。お気づきの方は積極的の声をかけて、市役所か最寄りの交番にご連絡してください」という感じで。

広報スピーカーで放送されるたびに、ご家族のお気持を推察していました。実際にそれらしい人を見かけたことはありませんでしたが。私は2016年に脳出血し「ほんの1センチ四方」の出血で、右手、右足に軽いマヒが残っています。

右手、右足を動かすようにしないと筋肉が固まってしまい、動かすのに差支えが出てしまうので極力歩くようにしています。小田急の最寄駅から自宅まで歩くと普通でも30分～40分かかり、脳出血以降は1時間半～2時間かかります。昨年はホームページの記事の取材、執筆などに追われて歩く余裕がなく、かなり筋肉が固まってひきつり右足がねじれる感じになりました。

リハビリを兼ねて歩くと、歩きやすくなるので、年末に頑張って最寄駅から自宅まで歩きました。夜遅い時間でしたが車の通る道を避けて暗い道を必死に歩いていると後ろから声をかけられました。「××町の田中さんではないですか」と。

振り返ると見知らぬ主婦らしき年配の女性です。「田中ですが、、、」と答えると「先ほど防災放送であなたのことをアナウンスしていましたよ」とおっしゃる。

「私は田中ですが、××町ではなく△△町の田中ですが」と説明しても認知症と疑われたのか納得してくれません。

「駅からご自宅までどれくらい歩くのですか？」と聞かれて「1時間半から２時間は歩きます」と答えると「△△町までそんなにかかりませんよ」とますますご心配いただいてしまった。駅から我が家までの道順を詳しく説明してようやく開放されました。

考えてみると、少々失礼な話しだと思うが、自宅に帰り着いて我がヨメさんに話すと「そんなヨレヨレのコートで、夜遅く暗い道をよろよろあるから当然よ」とにべもない。

でも、考えてみると「防災放送の田中さんではないか」と思って声をかけるには彼女にも戸惑いがあったのではないか。防災放送では「見かけた方はためらわずに積極的に声をかけてください」と呼びかけている。これも地域社会で人と人の絆を作る取組みなのだと納得しました。

見知らぬ女性に声をかけられるなどという、貴重な経験は長い人生の中でもめったにないことです。ずいぶん以前のことだが、いつもは乗らない早朝の時間に地下鉄に乗った。乗った車両は空いていて、立っている人はいなかった。向かいのシートに素敵な女性が座っていて、にこやかに声をかけられた。見知らぬ女性に声をかけられることのない小生は心臓がドキドキ。ドキドキするほど素敵な女性でありました。

ところが、その女性に「この時間帯は、この車両は女性専用車両ですよ」と笑顔で言われてしまった。慌てて周りを見ると確かに男性はひとりもいない。大慌てで隣の車両に移り事なきを得ました。後で思い返しても、件の女性の落ち着いた笑顔が印象的でした。（田中均）